

詩集

孤獨の愛

澤ゆき子著



東京

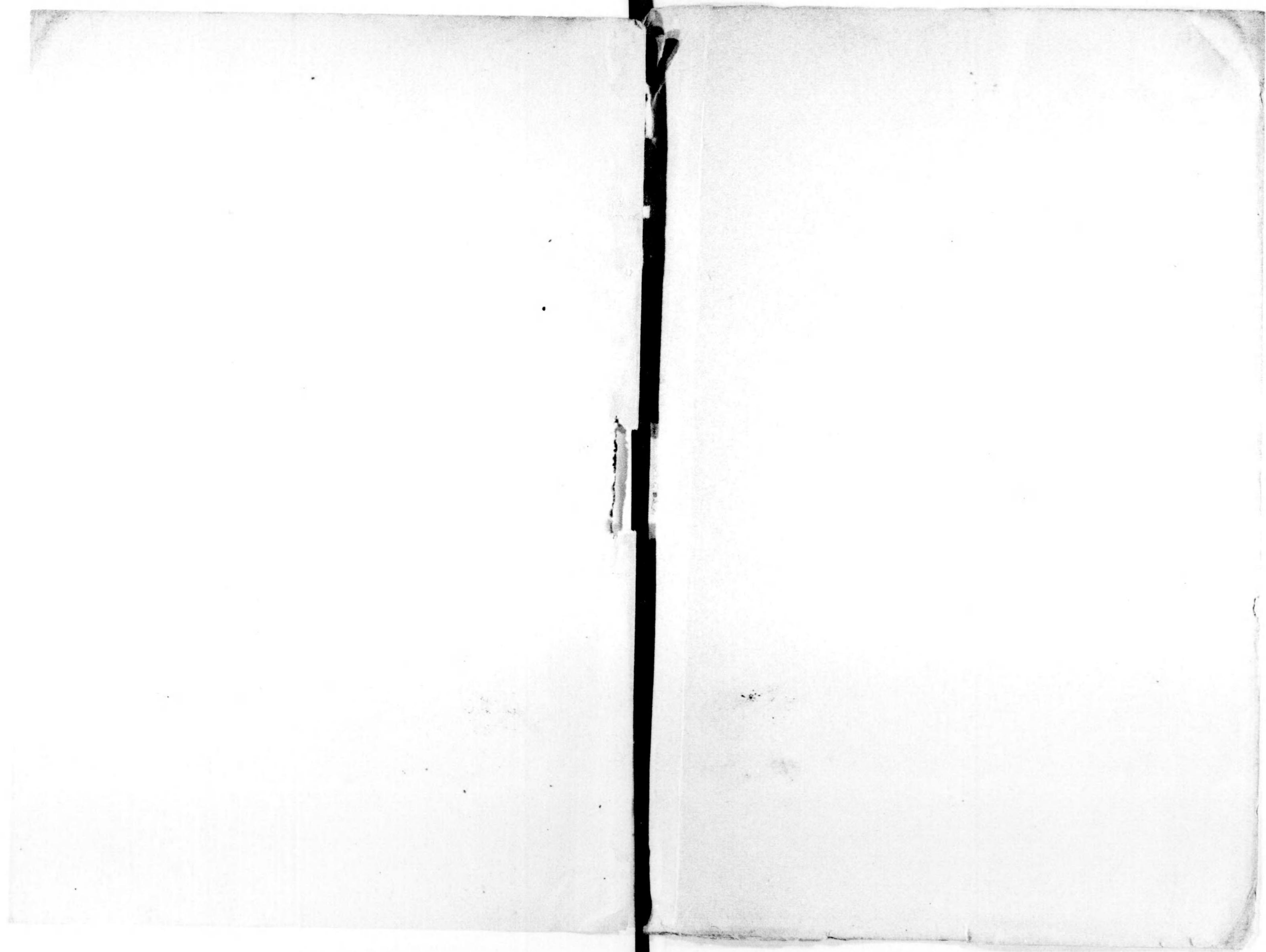
曙光詩社

MCMXXI



始





持104
641



詩集
孤獨の愛

澤ゆき子著



著者
寄贈本

東京
曙光詩社
1921

大正
10.4.26
寄贈

序

詩と女性、それは詩神が女性に象られてゐる昔から因縁の深いものである。ゲエテのいふ「永遠エウライヒライツヒの女性」は實に詩の中にあつた。「永遠の女性なるものわれを導く」と言つた詩句は一面詩が人間の深い、つきせぬ感情の泉にその最も本質的な生命を汲むからである。吾々の靈の安息と、我々の望む光輝ある平和とは實にこの「永遠の女性なるもの」の中に生くべきであるからである。

澤ゆき子君は優しい心をもつた女性だ。その詩は最も

なだらかな感情の波にのつて、夢のやうな、月光の下に
 嘯啼する噴泉のやうな、微妙な韻律と色調とをもつてゐ
 る。私はいつもこれらの詩に心を惹かされてきた。何と
 いふ優しさであらう。何といふ繊やかさであらう。もし
 て何といふ深い哀傷の響きであらう。この新しい女性
 は詩のために生れ、詩のために若い生涯を慰められてきた
 のだ。そして孤獨の中に愛すべきものを愛する心を與へ
 られたのだ。私の推奨する所は實にこの詩集には女なら
 ずはきかれぬ哀感と苦惱とがあることだ。

詩の究極はやはり個人のものである。その人の哀訴がその

人の慰藉であり、その人の欣求がその人の祈禱である。
 この孤獨な心に生きるこれらの詩はまた同じ悩みを味ふ
 人々にとつて何ものにもかへ難い「愛」であらうことを
 信じる。

大正十年三月

川路 柳虹

孤獨の愛

孤獨の愛

うららかな春の日を

深い空中にさ迷ひく上るひばり、

青草の處女地に、小川に立つてゐる私を

なつかしみく小さくなるひばり。

さようならがといふ聲が、

どこからか降りそぐ。

なせ女が泣くか

孤獨の愛

こんな儚ない疑に草の芽は
醒めかけた若い心に萌えいでる。

私の魂のひとつは、

すみれの花に埋れた畔のふき井戸に
生の血をもえたゝす……

私の魂のひとつは、

響いて血の流れる淵に這ひいでて
身をさく悲しみを掬み取らうと、

黒髪とかんばせとを
水にひたしてすゝりなく。

ひばりのそだつた地には太陽が
めざましく差込んで

紅や緑やむらさきの眞珠が
霧の中から舞ひ昇る。

はづし難いわが孤獨の草枕に
わかちがたいもの音をのせて。

孤獨の愛

やまうぢ

やまうぢ

(1)

なつかしきものは、

太陽の輝かしく息づく事なり。

吾が惱の

その中に躍る事なり。

なほ切なく微笑ましめよ。

なほも無惨に疲れゆかしめよ。

云ふ言葉もあらずして疲れ果てよ。
 やりばのない程の腕を胸におきて
 自らを温むるか弱き愛を求めよ。

願はくば哀れなる小さき耳を捕へて、
 惱みの深さ悲しさを云ひてきかせん。

されどかゝることがらは

あまりに果てしなく、

吾には深きいじらしさなれば、

やまうぢ

只黙すよりせんすべなし。

なれやすきものゝ如く腕のうちに

思ふがままに唇を燃やし、

か弱く疲れし愛の時は

心の響深くとだへて

わが靈は無惨に、

恐るる事をも忘れりたり。

いたましくもあえぐ喜びと

おもひ出のかすかなる心の眠よ、

されどもその深みの蒼ければ、かよはければ

つかれたる心いつしか

水にうかぶ光の如く自らに溺るる。

(2)

美しくしき病人の胸をゆすれよ。

あだかも光の寢床を探る快よさ――

手の上にてあふれん。

吾はあどけなき娘子にて……

やまうら

唄を奏づるにも驚くばかり熱中し、
心地よく唄聲を振りたてて
何か氣にかゝる優しさをば、
吾は青草の上にて揺りにき。

さればその日は

吾は流るる水の如く

やはらかき翅を輝かす。

空をゆく焔の聲に、

血汐なすもろ腕に、
はてしなく吾の足搔の絶えんとする淋しさもて
われははすみされど吾は苦しみ、
われ悩むが如く揺らるる。

されば光の尖端をめぐけて、
たゞひとつにあつまりし沈黙により添ふとき、
わが肉體は強き恍惚を食れり。

(3)

ぬるき流につらなりて、

やまうら

新らしの調は流るる。
 心はひとりあてもなく
 その時の音楽を追ひ出でたり。
 身をば溺らす親しさに
 ひそめる言葉を流し
 よき沈黙の中にいきづき
 交る／＼忘れたることばを思はむ。

あゝ吾が胸は雑草の如くしげり、
 あらゆるものは吾になづむ。

思ははげしく
 思はさ緑のなか空にかられゆく。
 底知れぬはての光に、
 さてまた珍らしき顛律に
 たふれたるままの軀をいねしめよ。
 しどけなき空の色にかくれたき
 吾は身動きも
 何もなし得ざるなり。

やまうご

吾は星の輝きの中に忍び入り、
只ひとつに悲しき暴力をあつめたき……
時折ぬるむ春風よ。

汝の夢のはばたきは、

身に泌み入る黄金の色と

微笑めるものばかり。

花振りかかる心に

みつむるはらたいの人の素肌、

あらはなる自然の姿。

限りなき線の上の調べに

ほのほの胸をおしあげたき。

やまうご

醒めざるもの唄

醒めざるもの唄

心は温かくそそらるる川水に、
たえずこぼるる花の光り
匂をこめし燐の奥に
かく吾は優しくも
交るくゝの夢をのぞく。

吾は云ふ事もなく酔はんとす。
思ふことは皆いたづらに蒼ざめたれば、

自らの眠にのみ歌にのみ慰めん。

光は樂しみに充ちてのび上り
静かなる二つの翅をばかこみたり。
吾が身はそこに輝き
微笑のなかにねむりぬ、
かくて不思議なる黄金の翅によりかかりて。

靈、よすべてのものよ、
只優しく息をあげよ。

醒めざるもの唄

醒めるもの

われは血汐の色もうせはて
 くりかへしく思ふ夢のなやましければ、
 新らしき眠のうちに來るべき
 ひとつの優しさをば待てるなり。

病 床

血汐をくぐる光のなかに、
 静かなる夢の安息はあり。
 涙の眼のそのままなるかげに、
 一切の輝くものを吾は抱かん。

深き夜は海の静けさよりぞ
 あらき魂の泣きすすりを
 孤獨の胸につたへくる。

病 床

病床

いはけなき悲しみをいたみて、
よりすがる夢もなき白き寢床よ。

たゞいつしらす強められし心の光に
自らを樂しますみちの深みに……
ああ吾はとある葉かげより
静かなる靈の來るを待つ。

夜の面ざし

吾は月光のうちに
青葉も風も揺らるるがまゝに揺らるべし、
吾があたりにさはやかに昇りゆく影を愛さん。
夜はかくも吾にかたる。

吾はあまねきものの柔かなる母體なり、
涼しく散る夢をして
やまうごを看護るが如く君をばひたすら優しくせん。

夜の面ざし

夜と吾と只二人の時。

投掛る腕に身のふるる樂しさをばはなて、

せはしくつまる吐息を吾唇にうつし

こころよく軽やかに抱かれん。

月も青葉も燃ゆるがまゝの光の中にて――

岸邊

吾ら互にゆるし合ひぬ、

心樂しみて一つの櫓をとり上げ

水流をいろごる太陽の明るさに、

ふたつの心を輝かさん。

何ものをふせぐ力も吾にはなく、

何ものを忍ばんとする心も吾にはとぼし。

さればわが愛は幼兒の如くかなしく、

岸邊

岸邊

まことは捨て去りし花の如く
 柔かなる音にも似て、
 ながるる泉の中におぼれゆくのみ。
 愛に蒼ざめし吾が頬をよせて
 思ふがまゝに泣かじめよ。
 無心によりて和らげられし君こそ
 楽しく櫓をばとり上げん。

孤獨のいのち

吾が悲しみは、
 吾が心の外にはきこえぬ聲なり。
 悲しき暴力は青きかなたに見ゆれど
 そこに充つるもののみは、
 人には知るすべもなき
 小さき弱き吾が唄なり。

はてしなき愁にむらがる「愛」の孤兒よ。

孤獨のいのち

さしのべたる腕に
 亡びざる歡喜をたたえて
 眺めやる悉くこころのものを
 燭の心に照しいでよ。

蒼き光に打たれて眠る孤兒を、
 心のままにゆり起し血汐の唇もてぬらさん。
 孤兒よ、戀よ、近づく暴力はあらくとも、
 吾はいま限りなき喜びの時を待ちたり
 吾はたゞ燭の如くなりて、

心なくひらめき遊ばん。

(2)

青き草間に濃かなる光は輝き
 吾は太陽と共にあり。
 病をいやす優しさを、
 美しく吾に向へる心を、
 吾がいのちは待ちたり。

あまたなる思のうちより
 さいはひなる眠は静かに始まらん、

孤獨のいのち

孤獨のいのち

君が髪の花よりもうすく
 みことなる黄金の色もて
 太陽の中に身をしのばしむる喜びを、
 わが夢の匂はこぼさん。

草葉と自らの涙とおだやかに輝く様を見よ、
 すべてにまさりて美しくしき搖籃にぞ
 あゝ吾が苦しみを封せし眼はあり。

このとき孤獨は甘へたる聲をもて、

ゆるぎふしをばさしのばす。

不眠の床

不眠の床

夢は弱々しくのび

うちしのべる肉體の香に強く泌む。

あこがれの思を散らせしわが寢床の上

なれやすき心の如くしづかに

「愛」は近よりくる。

吾は今宵の光に暗き眼を上げたり。

何ものか安らげき腕の吾が命を抱かんとし、

美しくしき不眠に泣く愛の孤兒をしかと口づけんとて、
空の中より手をのばしたれば……
楽しき影の如きうはごとを
限りなく求むる喜びに耽らむ。

憫の中にて殊更弱げなる優しさ、

かしこの星の如くさ迷ひいでて

ひそかに喜び合へるは吾が「愛」なり。

美しくしき不眠の重なる夜に

孤獨はぬれたる夢をだきしめつつ、

人しれぬ言葉もて寂しきものをきかんとす。

あゝかくも其心に優しく自らの輝くをばいかんせん
こよいの床の温く、
吾をめぐるうれしさはあまれり。

吾ながら愛する心

ほのかなる風はふきいでて
わが心の疲に、
もはやねむらんとする病人の上に、
あきざる花の香をきかせんとす。

二人の外に人には會はざりし日のさいはひに、
吾が總身をふるはす唇の血の響を思ひ
弱きみどり兒はたえ難き心のうちにしのぶなり。

吾ながら愛する心

消し得ざる強き言葉より
 自らつげ出づる心と、ま夜中のおそれと
 さは云へ吾が涙は今も落ちてうるほさん。
 日なかにゆらぐ紫紺の翅をとらへ、
 われ乍らそのかげにあふれて見んとする
 小さき愛らしき娘心に。

吾は花の咲きいづる中に

音楽よりも美しく高く閃めく聲を求めて、
 その中に君をば柔かにかくまはん。

飛鳥の如くはなやかに光を放つ夢の群に
 驚きやすき娘氣を胸に抱きしめて、
 何時いつとはなくすすりなける荒き心にも
 病める君のみは何ものも見ることもなく、
 たゞ悲しく優しげに蒼ざめたり。

吾は花の咲いづる中に

吾は花の咲いづる中に

吾は花の咲きいづる中にありて、
穩かなる瞑想を吾が命にたづねん。

愛せんとする君が眼は、

あまりに吾を見つめたり。

吾は君の無心なる親密を欲せり。

吾をだに母體の如きひろやかなる

自由にすゝりなかしめよ。

吾は花の咲いづる中に

さなくばひろきみ空に吾を追ひ

光に満ちておどる様を樂しましめよ。

あやしき血の胸に起りて

思にあまる愛の勢いきほひにたふれん。

淋しき光

淋しき光

(1)

唄の上に涙は流れそむるとも
 かしこに若き戀をば輝かしめ
 はばかることもなき喜びにむつみ合はん
 かの空の蒼き星の如くに。

抱かるる夢見ごこちの刹那にも
 いづこにか悲しさのひそまりて、

人の言葉のみにては
 わが戀の慰むすべもなし。

光と惑亂との中に歎けよ。
 夜は低き微温に憐きものの息をおさへたり。

かくて悲しみつくす唇に
 たえ入る靈の唄を歌ひ
 わが心は美しくより添ふものを感じつつ
 のびゆく愛を果しなく輝かせん。

淋しき光

淋しき光

(2)

うすき青空のなつかしさは

吾を抱く腕に温く光れり。

おののく人の如くそのなかに

吾は閉じたる眼に美しくしきものを見つめて、

つきざる喜びの中に苦しきまで心ゆだねん。

吾が空は愛の音楽のむらがりて、

麗はしき花粉を散らしたり。

われは魂を黄金の鎧におほはせて、

好もしき夢とともに立ち上り

喜び満てる騎士の如くふるひたたん。

あゝ君よほのかなる夜に、

遠き銀色の聲とふれあひて

人の知らざる思に吾は血を湧かさむ。

君はいよく身をよせかけ吾を痛む迄抱けども

いつまでもこのままに吾はあらんと願ふ

ふしごの布に身をうづめて、

淋しき光

淋しき光

さめざるものの嘆く
淋しき光の中にこそ。

ひこりみの日

(1)

吾はあまたの聲の中にて聳せし人の如く
溺れて泣き、
みにくき思を閉ざして
もはや神の前に悲しみを告げさらん。
あゝたゞ吾を悲しみのままに
あるがままの悲しきらしいにてあらしめよ。

ひこりみの日

永遠の酒に酔ひたる

青き吾が肌のみ、

生きたる月の如く冴えてゆく肌のみ、

人には許さざる淋しき樂しさに彩られん。

いたづらなる疲と熱とに

何をか吾は誇り得べき、

とりすぎる安息と

夢とは只遠くにゆるるのみなり。

また何をか吾は誇り得べき。

(2)

そは長く苦しめられたる

吾が最も麗はしき命なり、

されど吾が思ふことは語り得ぬ程吾を離たる果の、

いやはての日の空の色の如けん。

吾はひしがれたる手に

只輝くことの喜びを集めし秘密の言葉を、

うち語る友のみを求めあかせり。

されどちひさき失意に己が面を覆はざらん。
望みと悲しみと

湧きおこる弱き怖と

われはそれらによりてふるへたり、
またそれらによりて神の前に立つを得たり。

しだいにかの嶺へと導く空の眺め、

心をばさはやかによびさまし

小鳥の如く吾が翼をもち添ゆる空の中に。
われはいまだ力なく病み、

わが息は孤獨の森の調べより
熱と愛を喘ぎたゞふるふのみなり。

のどかなる眺

のどかなる眺

照り誇りたる日と共に思は昇り
あつき眼にうとくと
知らざる幻は群がりて、
いつしか涙のうちに染む。

かくて悲しみになれはてて
心は巢の如く温かにひらけゆく。
もの呼ぶ如く香とまじりて降り

のどかなる眺

身を寄するにふさはしき肩のあたりも
そこにさす光も
かくまでにいたはりつくす。
いかにいじらしき微笑もてなすも
いたはり難き悲しみの力よ、
あかくと晴れ渡る天幕を
その力こそやぶりはつ。
ひとりさみしき愛の力のみ、
うるはしき天幕へと向つて

かほそき嘆をらたいのままに立たしめむ。

心のやまうご

吾が語らんとするあらゆる聲を去らん。
 かくも長き間に來る
 身のくるしみの中に静まりて、
 柔かき小鳥の脊の如くゆるるる
 吾が思をさらに思のなかに溺らしめん。

心よ、いつも若く親しくあれ、したしくしづまりたるま
 まにあれ、

されど介添へする腕もなくて
 いかにも自らの手にさむさをしのがむ、
 いかに光の吾を蒼きかげにまもるとも
 いたづらに弱く驚くなかれ、
 この時われははげしく悲しめるままならむ。

吾には思のみ多くして訪ぬべき方もなし。

あゝ吾が歌と孤獨と

かくも疲と失望とを残りゆきしあとには
 いかなる柔かき言葉も

わが心の病人をいやしがたし。

ひるもなほ

ひるもなほ

高き調の中に、

そよぎ鳴る木の葉と枝、

優しく泌み出づる哀れさは

灰色にうるめる眼もて

吾を見る如くうちしづめり。

いかにするともおほひ難き

肉體のふるへをよせかけて

思のかぎりなく長き時、

君が頬と吾が眸は燃え、すすりなく涙に輝く。

胸のふかみに吾ならぬ影をはかりつつ、

靈の悲しみは水の如くひらめく。

身をおこして、

かく吾が嘆息の木の葉の聲をかき抱きて

しはがれてとびゆく悲しみに

ああ思はずも吾手に吾手とりて、

底知れぬ悲哀に絶りて泣き

ひるもなほ

ひるもなほ

ひるもなほ蒼き姿して、生命は力なくうなだるゝ。

ただひこり

灰色の聲をもて唇をぬぐはしめよ。
 わがひざまづきし神の名をふりすてて
 祈願も接吻もなさざらむ。
 吾前には吾ひとりなる厭はしさのみ
 はただ知るなり。

惱の中にて疲れたる心をば、
 さはやかなる白銀の音楽もて停めよ。

ただひこり

ただひとり

あゝ孤獨と悲しみの絶巔に
 吾が足は今もなほふるふなり、
 身を投出して溺れ
 自らの熱もてはりさくる
 限りなき夢を胸にかきいだきて、
 あらぬものかげにひきづられゆく
 くるしみと疲のわが膝よ。

自らの手をあげてふたつの眼をかくし、
 湧き返るざんげと哀の思をいだきしめて、

凭れて起きざれば吾身は立つに由なし。
 あゝ吾はよきかくれ家もなく
 光のさしくるさへ厭はし。

ただひとり

ひとり身

ひとり身

吾心よ

青白きままに、

傷ましく只傷ましくおひたてよ。

麗はじき胡蝶よ、花の中に眠ねて

うつゝなりしことを喜べ。

空よりのべきたる腕は、

ひとり身

花の匂のうちにおん身を抱きしめ、

星よりも輝かなる幻に衰えし吾が身を包みぬ。

あゝかかる悲しみの吾なり。

あゝかかる癒しがたき吾なり。

そはいかほご強く口づけたりとて悲しからん。

たとひさみしき微笑の中なりとも、

わが戀の心は解けざらむ。

ばら色の小徑にひとりゆきて

優しきひとにまみゆるとも。

靜かに風の夢みる日

靜かに風の夢みる日

うららかに輝く日のなかに、
かく孤獨の黒髪をのばして
はてしなく永らうる病の心を
自らの悲しみもてなぐさめん。

神の心もしりぞけ得たる自由なる寢臺をば
柔かなる花園の熱にほてらしめ、
清き酒の香もて心ゆくばかり輝かせん、

吾は寢臺の上に楽しく身をのばし
そこに思と云ふ思をばひそましめん。

ほのかに風の夢みる日は、
靜かに愛する心ぞ來る。
黄金の翅は吾を覆ひ、
眼を閉して耽る甘さに溺れ泣く。
けだるき肉は溶けゆく許りせつなければ
喜ばしきばらのしとねに身をのばし、
心やすくもたふれんとす。

靜かに風の夢みる日

力ある腕もたのまんとせしことなく
 孤獨の戀になれはてたれば
 ああほのかにとげんとする夢のなかの
 接吻のしばくなる悲しみよ。

かなしみの日

(1)

悲しみは白く浮ぶ腕の如く
 手さきに觸るる夢を求め、
 裂けゆく如き夜嵐に埋れて泣き、
 ねむりがたき苦しみは
 星よりもあきらかに今心を昇らんとす。

あゝ夜のあとにはかくも長くつらなれる
 知り難き唄のふしに

立寄るべき古郷のゆめも蒼ざめ
 みるかげもなく愛もまた暗くかげり
 吾は捨てられしなり。

おほふすべなくなりし心は
 光の悲しみに抱かれて迷ひいづ。

なきしづむうれひと愛と
 ああわが身のつかれをぬぎすてん。

冴え渡る星の夜の泉にたちよりて、
 静かなる床の上に靈は
 銀色の姿をうつすなり。

(2)

君が慰は如何に優しき言葉のうちなりとも、
 君が額をうち仰ぎて
 涙するのみなる吾が苦しみ。

君がか弱さは

傷ましくも美しくしき村人の唄に顫へたり、

かなしみの日

かなしみの日

願はくばただ

生れてより喜ばざるわが深き罪の手を

いくへにもねじまげ、

あらん限りの憎しみをのべたまへ。

空は一めんこがねいろに黄金色の夕煙して、

小さく疲れたる心のうちに

涙しげき牧場のけものはうめき出づ。

獨唱

たどひ小さかるとも、

そのかげは深くして

響ある力もて迫らしめよ。

めざめて知るわが幽爵の

あまりに佗びしき瞑目のなかなりしことを

切なくも思ひ見ぬ。

金色にそめたる葦の若葉は

獨唱

獨唱

叫とあこがれに酔ひて動かす、
 月はひそやかに昇りつつ
 沼べりをひくくさ迷ひたり。

ああしげし身をおくかげも
 安息もそこにして、
 吾は祈願を重ねるなり。

吾は水鳥の喜びもて狂ひ、
 噴水の根方の岩にひざまつきたり。

獨唱

水は吾がためにのみ吾を溺らしめよ。
 わがこの上にしはしなりとも響をあげよ。
 吾はひろごり夜はたたへらるる極の唄に、
 その上に、吁その上に、
 吾が胸の限り甘き燐をして上げしめよ。

吾を知らざる悲しさに

吾を知らざる悲しさに

吾はわがなしたる愛の何ものにもあらぬを悔ゆ。
 小さく汚れたる名によつて呼ばれ來りし
 戀の悲しみと堪え難き嘲りとより去らしめよ。

眠れる月魂の如くも忘れられて、

安らかに吾のあらん日をこそ

苦しくいためる病の指をのべて

吾はいつの日か麗はしき無我の乙女とならん。

吾は光につつまれし姿をのみ思ふより
 わが哀に傷ましくも疲れ果てたり。

吁今身にたいよへる憂苦ぞ

悲しみの心をふさぐ。

かくて暗き夜に、もはやとばざる小鳥の如く
 果しなき憧憬と

いやはての日の儚さを思ひわづらう。

吾を知らざる悲しさに

夜の歌

夜の唄

(1)

歎の聲をたゞよはせ、

柔かなる歌もて眠に入れるおさなごの

弱き悲しみにつながる魂をば

静かにくわが夜の光はさしのぞけり。

そのおさなごの夢みる傍にまつはれる

輝く無心なるあごかれ、

夜の歌

湧くが如く光の聲の中に楽しく唄ふ。

快樂の望ど、脈搏を左右する命の暗さとより、

わが魂は夜の嘆にぬつづけん。

光と風との美しくしきたはむれに

幼児の心は微笑の中に揺れたり。

(2)

くまごられたる森の終夜、

光の煙るなかに息を求め、

かくわが心は踊らんとするなり

夜の歌

長く病らふ夜の孤獨を封する樂しき夢は
 甘きものの奥より麗はしくたゞよひきたる。
 吁かくれがの如き林間の自由と光とは
 優しく抱かるる時の面ざしよりも美しく
 わが息のむせび泣きする方に流れたり。

眞夜中は輝く神の心も衰へよ。
 いとすこやかに思ふことをば胸にかぞへ、
 ばらの如くひらける孤獨のかんばせをば

心あきなくもたげて見む。

吁今も露は草原の上にて唄ひ、
 おもむろに映りくる月かげと共に閃き、
 わが命は静かにかしこに遊ぶ。

夜の歌

まひろの水盤

まひろの水盤

高き空の梢に

漲り湧く緑、

空には静かなるもゝのいきづきて

ひろの花は黄金こがねの光をたたへたり。

甘やかにさゝやきの唇を動かすとも

言葉は消えてゆく滴の如く一つ一つ忘らるる、

吾乍らあたりの優しさを感んずるなり。

まひろの水盤

ああ銀色の花と胡蝶とまひとつどふ

ましろき水盤の水に指をひたして

わが魂は戀しき人に抱かれし如く、

うかゞひよる夢の焔に

静かなる身をよこたふる。

夜のこゝば

夜のこゝば

星はこなたに向つてひとときに閃き渡り、
あけ方の湖の如きあかるき戀情は
かをりよくめぐり来る。

夜はこどもなく光に近づき
輝の中よりいでし孤兒^{みなしご}は身を上げて泣き佗びつつ、
青葉のかげに翅をのべしままにて
忍びやかに夢見る甦生。

あゝ希望は病にまつはられたる母人の如く、
悲しみに命盡したれば
如何に唄聲の切なりとも、
静かなる風の中にて失はれん。

たゞわが心に海と絶壁とうちかたるなり。
岩頭に向つて慕はしげによちのぼれよ。
美しくしき死と夜とによりて
きらびやかに星の晴れたる。

夜のこゝば

夜のことは

つかれ／＼て二人の愛撫の横はれる
絶壁のいはほにと。

樹 下

さくら、桃の果たわわにさがりて
われらがめざす丘の上に
風は心地よき思を送る。

君が歩の忘られてあるが如く
いそぎつつも胸おごらせ、
眠るが如き夢のおもひもて
かの樹の下に吾等たのしまむ。

樹 下

樹下

ふるへ泣くわが心に接吻す—
 君がくちづけのゆるき思の如く流れて、
 牧人の唄
 空のなかにと溶けてゆくなり。

わが世のさま

いまひとたび悲しみのわが手を
 病をさそふる弱きわが手をのべ、
 麗はしき夢をもとめしめ、
 せめて静かなる安息をば慕はしめよ。
 はかなく取残されし命に
 下草の惱は泌渡り、
 いとほしく厭はしきわが世の姿を見る。

わが世のさま

わが世のさま

さればすべての他ほかより来る聲を遠ざけ、涙にぬれし

思のみきたれ——

ふかきわが心をふたつの手をもてすくひ上げ

長かりし苦しみの前に

黙してひざまつくわが身をば

とむらふすべをおしへよ。

女の命は花の如く優しければ、

いたはるすべもなく

わが世のさま

歩めども行き得ざる身の悲しみに

あゝわが胸は傷ましき恐をなしてはりさくる。

悲しき戀

悲しき愛

吾はいかなる樂器をたづさへてまつべきや
 姿やはらかきおなごは
 そこに涙にぬれたり。
 いかに甘へたる心をつくして、
 月夜にふるふ慰を手に受けん
 聲さへ上げ得ずして惱める接吻を

わが胸にさぐり求め、
 わが不眠の苦しみに、
 熱ある涙の顔を向けて
 おさなごの如くもむせび泣かん、
 ああ生れながらの絶望に身を寄せて
 われ何をめざしてゆくべき。

かく思のみ深く夜は吾につらなりしぞ、
 醜みにくき手を捧げて神に使ふる事の厭はしければ、
 うつろの如く黙して、吾が嘆は、

悲しき戀

悲しき戀

うち煙る月の空にと消えゆかん。

暗き魂

知らず目ざめた時のやうに
 懊惱や絶望が手をつないで
 此方を冷嘲してゐると氣付く程、
 心が切ないものがあらうか。

あの小さい星が一時に足元へとび降りて
 鈴虫のやうな聲で啼いて呉れたら
 私もいのりの歌を唄つて、

暗き魂

あの好きな森の下で休まう。

激しい動悸があんまり胸のなかを騒がして

惑亂の墳墓のかげに私の手を取つたものがひとり、

黄金の舞踏にさめかけやうとしてゐる。

それでも私には二度起上る事の出来ない疲が
打撃のやうに挨拶する。

憐むものや優しいもののない世界で
私は私をくつがへさなければならぬ。

私は神の使命に背いて

運命をかきくどく亡者のやうなしうねんをもたう。

光へ

光へ

涙の前に慰めなく

流るるままなるを思へば、

あきらめ難きは自らのありさまなり。

されど孤獨の翅は柔かくしてわが胸に應はしき小さきか

げなり、

涼しく輝き渡る影を静かに集めたれば、

いかに親しきひとなりとも

ひとに與ふるは惜しき。

若き舞姫の如く袖振りかざし、わがゆく徑の上に

わき上る光は充ちてあふれつつ、

吾が身と空のなかに照り合ひたり。

ああただひとりして、

生の前の光へ

疲にいたむ足をもたげ

さらに一步の力を試さんとする

光へ

光へ

吐息に充ちたる吾のせつなさよ。

まはだかにて太陽の光にふるる如く、
吾自らの思にて吾を愛さんとする東の間は、
あらゆる疲と苦しみに
堪えがたく迫る感をばおこすなり。

小さいやすみ

秋風は並木から畑のなかをふきなぶり。
戀人は忘れた唄を私にきく。
氣がるな労働の疲が柔かい肌に沁んでくる小さい二人が
休みの時、
戀人は私のむき捨てた豆がらの上にふせる。

もろこしの青い葉風と光にもつれ乍ら、
長い影が私の髪の毛に花のやうに止つたことを
小さいやすみ

小さいやすみ

あなたはよねもなく私を見て
いじらしい眼付をみはつて其の事を大切さうに賞めた。

かよはい二人の胸の押ひらくだけの力と勢と

ああ光の雨と降る只なかに

らいはいの心もてしばらくは

花のくちづけよりも

なほするごとく私はおびえてゐます。

あたたかさうな兩方のひざの上に

小さいやすみ

私のかほを埋めさせて下さい。

まだ私の知らなかつた悲しみをあなたも知らないと答へ
られた時、

こらへきれないせつなさをだまつて微笑んだせつなを、

ときおり思ひ出させるために

たださうつと私をやすませて下さい。

草刈

小雨のやうに美しい光が一すじ
雲は破れて微かな風が圃から、森から、
小蜂の翅を面白さうに揺るがす。

遠い地平に消え去つた旅人のやうな心で、
鎌をつきたてたまんま
私はしやがんで見たり、
私の心の中で誰も知らなさうな沈んだ歌をうた

つて見たりする。

長年の孤獨にむねを冷やす寂しい時、
私のこの歡喜はいかな悲しみも越えてゆく。

秋の果實の花飾に深くかぶさり、
こころ安いねどこに撒きちらした星のやうに
私は一つ一つそのきらびやかな胸の幻を
たどひやうもなく愛さうと思つて、
ひとすじに泉いづみのわきでやすむのです。

たごひ難き悲しみ

たごひ難き悲しみ

私をお生みになつた日のひの色を
私を抱きしめてくゝそして
くはしく叫いで下さい。

月はおびたゞしき光を散らしていま

私の池の面はほのかに紅くためいきしてゐます。

もしもその夜の次に晝がつゞかず、

太陽さへ輝かず暮れたならば

肌は灰色にもだして生ひたち
苦しみの針もてわが身はさゝれしままにて横はつたで
せう。

母さま、私をお生みなされた日實際あなたは

幸の感じの中におありでしたか、

思ふことはみんな、あああなたの御許しなされた自由

は蒼ざめてはてた影ですのに、

あなたは私をお生になつた時それでも太陽の光と一緒に
におありでしたか。

たごひ難き悲しみ

たごひ難き悲しみ

生れながら孤獨のむごい塹壕におちいり、悲しい匂を
海綿のやうに私の軀は容捨なく吸ひました。

私をお生みになつた日の色があなたの唇から再び呟き
かねるほど不明であつたために、

私の心は暗く濁つたまんま、

地上の靈がゆきつくところに倒れてゐます。

思はざる苦しみにさし上げた私の手のうちから、
涙をしぼるやうに私の嫁ぎの指輪が輝く時、

吁かあさま——

私はこの上に死を厭ふ病人のやうに
神様から冷嘲されることを好みまん。

たごひ難き悲しみ

やすらげたましひ

やすらげたましひ

腕と腕の間を匂はしく、くったりぬけて、

光は身邊にかゝよひ遊ぶ。

はなやかな夢み心地に

可愛い小鳥のやうに

私は覗く。

おぼろげな輝が菜畑の上に昇つて、

どんなに柔かく優しく私の歩調にふしづけ、

私のまるい腕にだかれ、

どこまで大きく光ららうとするの。

温く投げはなれたまんま、

いい心に照り返す。

本當にうき／＼と口ぶれてみたいやうな自分の心。

野良一面に青菜の露がふくれて星のやうに楽しい。

耕作に出る私の足は一步一步音楽の奥がをさして躍る。

やすらげたましひ

やすらけきたましひ

小徑の上に黒髪を解いてうつむいた私は、
只知らない深みへと眸をこらす。
そこに安眠をするたましひに
私の限りない夢を
頸飾らうと思つて。

岸の光り

水面はむらさきに晴れて、
白波は根よく滑ります。
快よい微動をかぞへつめて、
たかまりあふれた空の流れは、
いま無限に奏でてゐる。

わたしの歩行をとりかこんでひそやかに輝く光を
み守る静かなよろこび。

岸の光り

岸の光り

わたしは火花のやうな草の葉の
 光の柔かいうごめきにつまされて、
 またしてもく湖畔の草地に降りてゆく。
 いまの身にてる光を、
 そのまゝに散らさぬため。

小さき笛の音

涙にぬれた言葉を
 總身をかゝめて掬みとらう
 いじらしく顛倒した魂を
 たすけ起さう。

心よ静かな空の中に
 いまたえきれずたざりたつ

美しい焰を浴びて立てよ。

さはやかに伸した姿のまま

熱した心から笛よ。笛よ。

黄金の焰に彩られて思ふさま響け。

ああ綺麗なたましひが夜の月の下で泣く。

涙はつきず流れる眸をば

いのちの上に照りかざす。

私の唇の優しい力、

ふきおくるたび毎に私の笛は色めき、

そそられる夢を

しらすにかきおこす。

躍る肉の鼓動を熱の手でしつかりとひしいで呉れ、

光と云ふ光をみんな集めても私はたりない。

花と云ふ花をみんな積上げて、

その匂で私のひたへを温むとも……。

燃えさかした心が酔つてゆくまでには、
 呀、思ひあまつた思を
 ぞこの草原の上ではどかう。

春の愛がはじめてみじろぐ南方へ
 力の限り私の笛をふきあげやう、
 心のかすかなうごめきの中へ
 日はうとくとねむつてゆく。

夜の光り

銀色の夜天をこめて月のふる中に、
 そいつは香り
 影美しく並びて立つ。

疲れしものゝ呼吸と惱とを打去り、
 輝やける傍へと
 あくまでも心いそげるかな。

夜の光り

いと明るきまなざしを向けしまま。
 忘れ得難き響をば
 君まつときの切なさにあつめたりし
 夜の吾なほ若かりき。

ましろなる石橋の欄に風の如く舞降りる夜の花に
 誘はれ出づる心をふりかへりて、
 この柔かき泉のほとりにて
 いかにしはしなりとも夢見てあらん。

夜の光り

もろ手をつなぎ合はしめよ。
 膝おりまげて
 いろめき渡る林中の白き石橋によりかゝれば、
 浪の如くに夢ぞくりかへす。

憔悴

憔悴

残る光は淡緑なる輝もて、
吾がよりかゝれる窓を閉ざしぬ。

心燃えたる密室より、

ややにかげりゆく愛の如く、

眼うるませて動きもせざる心は

さじのべたる腕も蒼くして

切めて埋めたる首をば自らに抱くなり。

ああ吾が頭を照し出づる光の

きままに美しくして

優しき思の如く心に充ちてあふるゝかな。

喜ばしき月におぼるるわが身のおひたちを

束の間なりとも勢あるわが愛のために、

夜天も地上も響くまで

心うしなひ、

かれんなる姿をもて眠らしめよ。

憔悴

花の木かげ

花の木かげ

咲きそろつた花の上に
うづたかくつもつた日光の喜び。

氣恥しい童女のかげに寄添つてゆく
若々しい私の足跡の音楽に、
思ひ及ばない浮々しい喜びに、
魂をばゆする。

花の木かげ

小枝をゆすつて私の髪に濺ぎかけるやうな、
夜つびて私の前を透きとうつて流れる綺麗な空よ。
ひきどめて沁沁と覗き入りたいやうな心で
ひと晩中唄をうたひつくす。

月に酔つて倒れても、
匂が投げかける光をうすぎぬのやうにまどつてゆかう。
本當に忘れられない氣丈な歡喜、
手も足も伸びる丈は伸して光つた風に吹かせやう。

沼の歌

夢幻の園にむつめる戀人を
輝かし慰めるたそがれに、更に嬉ばしいことは、
交るくうたひつれ
ふたつの聲の合さりて
ゆるく流れることです。

水鳥のねむげさすなかに
安らかな夕が匂ふ、

私は白がねの波に双手をはじかせ乍ら、
次第にいただき上げられて、玉のやうに沈黙する。

水蓮の花をゆるる風のやうにあなたは
私のひたへをくちづけてだまつて櫓をやる。
紅い光と金の闇ともつれる空を見上るひまも
ひたくと櫓の音たかく湧き上り、
舟はゆくゆく。

沼の光り

沼の光り

白鳥の水面にたはむれるやうな心で、
 のびやかな思は私をめぐる。
 光を吸ひ、力を誇つてゐる
 響を上げるつよいあこがれ。

流にぬれた下草の露は閃きつつとびかへり、
 匂をうけて水の色は躍る。
 さいらんたる夜天はくまもなくて、

沼の光り

夢をどくやうな白い素足に風はさはつてゆく。

光よ光よ君によりて解かるる心ならばと、
 もちあぐめる心をかへり見する。

私は銀色の沼澤の葦むらにかくれて泣き、
 微笑みつゝ、ふたつの手を併せて人しれぬ心で飾る。

(其の一)

沼の光り

沼の光り

私は心軽く、

光の石橋に降りてさ迷ふ。

温い命をこめて

ゆたかな日足はいまかげる。

日ぐれの沼に菜の葉を洗ふたのしい思ひ、

手先の光をもみ碎きもみ碎き

よびたてる鳥の聲に氣もわかしくしく、

沼の光り

綺麗な夢を玉のやうに貫ねてゆく。

水面をもんでかくれる銀の鳥、

入目を浴びた水の動搖は、

とりくゝの色あひのめざめに

はれくしくおどりつれる。

(其 二)

沼の光り

沼の光り

太陽の光よりのがれて
 何気なく輝かしい空を見上げた。
 楽しい眠に入らんとする
 安らかな夕べの流れ。

照りつくしたのちのゆりかごに
 私をゆする唄は充ちて
 微妙にくだかれた。

沼の光り

醒まされた酔の心を抱いたまんま
 いつも笑つてゐたい。

さしただせばすぐに握る優しいあなたの手
 どり散らした心かかへ出でて池の畔に私は降り
 今宵は最も粧をこらす。

(その三)

悲哀

悲哀

1

涙にぬれた顔をむき出しに、
 身を引くより外なき悲しみをもちこらへて
 樹の下にくづれ
 よりかかることもなくつくねんとただづめる
 光の中には出し難き私のいたで。

神の力よりも深く

悲哀

2

光をいたむ狂人のやうに、人氣のない陰を傳つて
 思出したやうに。
 時折私は慟哭する。

太陽の光りうち一ばい、

なほするごき忍耐の
 私の心をおさへて
 のがれいでんとする悲しみをば
 ひしとにぎりしめる。

私ははち切れさうな力を總身にたたへて
 四肢は溢れ来る熱望に輝きながら
 うなだるる頭を上へ上へと向かしめる。
 懊惱と吐息とによりかかつて、
 私がはじめての握手をかはすため
 ねづよく生の閃くさまを一つ一つより分て挨拶する
 私がはじめて交さうとする握手のために。
 私の胸に優しい言葉を口付けやうとするのは誰か
 涙にまみれた苦しみと
 苦しみあまつて何ものか求めなければならぬ

なほするごき忍耐の
 私の心をおさへて
 のがれいでんとする悲しみをば
 ひしとにぎりしめる。
 光をいたむ狂人のやうに、
 人気がない陰を傳つて
 思出したやうに
 時折私は慟哭する。

2

太陽の光るうち一ぱい、

私ははち切れさうな力を總身にたたへて
 四肢は溢れ来る熱望に輝きながら
 うなだるる頭を上へ上へと向かじめる。
 懊惱と吐息とによりかかつて、
 私がはじめての握手をかはすため
 ねつよく生の閃くさまを一つ一つより分て挨拶する
 私のはじめて交さうとする握手のために。
 私の胸に優しい言葉を口付けやうとするのは誰か
 涙にまみれた苦しみと
 苦しみあまつて何ものか求めなければならぬ。

その熱望。

石のやうにとけない心を安眠させるには……
 どんなにして唄へば私の氣がおちつくであらう。
 もしも悲哀がまあるいもので造られてゐたとしたら
 私はそのまん中で
 優しく生れついた王妃のやうに、
 綺麗ないんとん者のやうに着飾つておぼれ泣きをしたい。

初夏

初 夏

きら／＼と光る初夏

私の髪は風にわかれて波うち

日にきら／＼と輝いでゐるだけでも、

涼しい樹の下で舞踏する氣になれる。

新鮮な匂の底から

ふるへたなつかしい唄をおし上げ押上げ

こらへ切れない草むらの歡喜に百合の一群は、

ほしいままにはびこつてゐる。

日に日に太陽は降りそそいで、

風は絶えずも音つれてくる窓際の百合

私のいたむ胸をもう何度となく押付けた。

噴水のわきの枝に私の樂器をかけておいて、

さて私はくる／＼まはる大日輪のやうな心を

空と地とに投げ出す。

初夏

微光

微光

残されてさす光は静かで、

山の影はみなさかさに倒れてゐる。

その線の根元から波は揺れだすのだ。

力まかせにおまへを胸の中にかきよせて、

まつはつてゆくならば

こんくと盡きない心と心の接吻が知れやうか？

二人の唇は可成り優しくふるへて

微光

もう泣き止まないのに。

ふれ難いものの欲しさに密語と云ふ密語を

みな投げ出してゐる。

森と湖と仲よく輝いて

私をその接吻の中に待つてゐた。

どうしたならばおまへの心にゆきつくだらうか？

日暮のからすのやうに淡暗い心だけれど、

日をうけた狐の隠遁者のごこかで

森と湖と互に歡呼してゐる。
海 第

伶 人

あでやかな衣をまとつた唄人は
月の下をどこと云ふことなくぐりいでて
更にゆく處もなくさすらつてゐる。

けれどもそのまゝ歩むならば
まはりに散らけた光は躍り、
不斷の光は柔かな黄金の花と咲く。

伶 人

伶人

なよびやかに裾にゆれゆれて風は波打ち、
 長い孤獨は雲井で失はれたやうに
 心に情ないことはすつかりない。

しかし聲を張り上げるにはあまり燃えてゐる月魂である、
 黙つて黙つてひざまつく岸邊の緑色に
 楽しい密會をしつづけて來たやうに
 伶人は眸がすがすがしく輝いてゐる。

暮れゆく途

月のささない空のかたはらへと
 野はくれはて、
 雑草に残る光りは
 優しい叫をまつてゐる。

すごうりにはしかねたものの淋しさ、
 氣がつまる思で歩きまはる、
 人目をさけてするすすりなきの残るかげへと

暮れゆく途

暮れゆく途

野は暮れてゆく。

ああ私はすすんで了つて
絶望から絶望へとのりうつる。
私を愛しきれずにもれる涙、涙、
しめつばい處許りおちてゆく涙

泣くにも泣かれない隠氣で暗い眼から
ほごばしる悶絶した涙は、
かけつてゆく嵐の中にかきはなされた。

休憩

玉座のやうに親しく青い丘の草にぬかづいて
いちばん太陽とも親しい聲で話し出す。
人もゐない野つ原で
私の半ばが太陽であり半ばが緑の野原で
自分をひとつも考へない嬉ばしさにゐる。

小さな瀧の音をからんでくる風は
森林の湖を止めず渡つて

休憩

休憩

小舟の上の私の安らかな
ひみつをききとるやうに覗いてゆく。

腕を首にまきつけた如くに

さもしつくりと浸つてくる光――

照りつける光の滴は流れおつる。

綺麗な私の牧場に。

森の家畜らが私をたづねてこないうちに
胸もつくろいで

休憩

私はちいつと憩みの時のうたを唄はう。

孤獨

孤獨

神もしらない紫の空の中に
 私のあこがれは燐を上げて
 深更のたいまつの如くそこに静かな眼をさます。

神も知らないきはみに私は孤り失はれて横つてゐながら

も

私を飾らうとする音楽と星とに
 ぞくぞくと嬉しくなる。

孤獨

接吻と愛撫との御禮のあるたけをつくして
 私はひざまづいてゐる。
 着飾つたさゝやかな自らの夜の姿に。

そしてあかずにさ迷つてゐるけれど
 たくさん花のさいいてゐる途ばたを通るたびに
 私のもすそはその上にさはつていろごられ、
 身をていねいにかがめて
 たくさんたくさん花と接吻する。

うもれたる悲しみ

うもれたる悲み

(1)

亂れた空から

土に映る陰影と

おそろしい呻吟のきこえるくらがり、

すべてを甘くし

すべてを殺してゆく冷たい土。

心のわきに淋しくもえてゐる焔が

いま明滅の涙に慟哭する。

たたえた涙をばそつくり看護人にまかせて

銀色にふりつむ月あかりの中を

佗びしげにあゆんでゆく私は

かげばかりのやうにやつれてゐる。

慄へた哀願ばかりが高く鳴つて

嵐のやうに迫き立てる。

静かな私の憩ひのかげ、

うもれたる悲しみ

うもれたる悲しみ

なげきの臨終は
くちづける處もなく埋れてゐる。

(2)

蒼ざめた心には強いものは一つもない、
もろい優しさで力のぬけた言葉と、
私はずれたつていつも歩む。

憧れて輝くよりも

よろこびと美しくしいものを悔んでゐる馬鹿もの
不断の惱みに甲斐ない生涯を恨んでゐるすね者。

いかによい言葉が私を誘はうと
微笑む事をさけ、
見向きもしない私は只
だまつてばかりゐる。

ほごけないで、ほごけないで、
私の心に悲しみは結ぶ。
泣いて泣いて涙で押流すまで
くづれまいとする私のかなしみ。

うもれたる悲しみ

冴えたる晩

冴えたる晩

どこから見ても花許りが高く匂つて、
刻々と鮮かに浮ばせる
優しいきれいな歩調でゆきたい花苑。

月はみやびた餘韻の中に澄み渡つて、
なつかしい腕をひしと軀にまかせたまんま、
やけるやうに吸ひつくしたいと云ふ君が唄こそ
今宵は深くときめく唇にくり返さう。

したたりおつる月光は、
どんな深みへゆくかもしれない。

葉末々々を静かにわたる風に
自らの髪の中へと
心のとけ込んでゆくしなやかさ。

冴えたる晩

たさひ難きかなしみ

たさひ難きかなしみ

よい寶石の飾で止めて

私はあまつた髪をくしけづる。

けれど人にあへば、

私の眸は土の上に落ちて

ほめられる事をさける。

見ることの出来ない腕に囚はれた思のする時、

胸から頭まで觸らない處はなく抱かれた思のする時

ただひとりでに輝く。

私の絶叫と呪咀と、

血の滴にぬれる壯烈な言葉が

優しく閉じた私の唇を逃れて、

その時私はどんなに耳をすましたであらう。

(2)

靴をつた板のやうな

たいらでない心の面、

そのうらにおく魂も

たさひ難きかなしみ

たさひ難きかなしみ

表におく魂も
みな悲しい。

私のべつな眸は、
一人の殺人犯が血みごろになつて
ぎよろぎよろ私をにらみつける怖ろしい光景を見いだし
た。

心は姿を失つて、
何かの來襲するのを逃げまはつてゐる。

たさひ難きかなしみ

頭がいたみ出すごとに眼をばぼつちりとさまして見れば
哀れなうすぐらい一つの窓と
生れ乍らの幽閉
濃い動かない化粧をつけて私は長い袂で
額をおほつてゐる。

(3)

私自らころげ込んだ塹壕がそれだ。
光がたくさんく花片を散らしたやうに積つて、
風のごとかないふか穴で無惨に沈没してゐる。

たさひ難きかなしみ

むさくるしい痙攣で私の身は奥へ暗やみへとごらされる
おぼろな苦しみを呼吸しては、
轉々ご身もだえする。

涯なき斷崖に共鳴する響が私一人の所有物であつたため
此處には孤獨がもう長いことつゞいてきてゐて、
かなしみはいたましくひろげられてある。

私の慟哭は崖の外かほにあり／＼と洩れ出し、
草の芽のふき出るよりもはげしく響く。

私はある丈の力で身のびする。
崖の上ではその聲の悲慘をとむらう綺麗な親友。

(4)

胸がはち切れさうになると、
涙はそとがほにあふれた。

一つの惨い慟哭に別れる私は
また一つの慟哭の中へ、
腹の底からいら／＼してもう考へることも出来ない程
疲れ切つた昂奮が總身を巻き込んでゐる。

たさひ難きかなしみ

こたへ切れない唄のやうに積つた懺悔を力任に振りもぎ
つて

私はまたぼつねんとして出てゆかう！

秋の亡霊が淋しい音にせかれて、

もの静かな門の錠をおろしたために。

女らが

いく人と云ふことなく蒼褪めはてて泣いてゐる、
そして「私が親友達の懐の中へ跳ね上る迄には、

崩れた足は血だらけになる」と云つて。

(5)

何處まで響がとついたならば止むと云ふ悲しみなのか

つゞけてく泣くマンドリンは

私の手に抱へ切れない音だ。

沈黙するは私許だと悲歎にかきくれて

何も見上げる力の無い心の外側を、

蟲は蟲で鳥は鳥で別々の重たい夢の流を

おもふぞんぶん弄んでゐる。

たさひ難きかなしみ

啞のやうに悲しいものの泌み出た心から
 めしひのやうにさはがしい不眠の手をあげて私の
 さし招くものは何であらう……
 本當に散つた花が戦いて、
 土の匂を呼び立てる丈としたら
 お互に唇を寄せ附けて吸つて見る丈としたなら、
 「おゝ歩み切れないおとしあなの我身よ。」

心の貧者

私の唄ひ出る聲は
 まんべんなく悲哀にぬれて
 碎けた涙のおちる庇ひを
 見るにしのびない。

放つにも堪ええぬ傷まじい手を
 みづからとりあげて
 さて私はどこにゆかう。

心の貧者

心の賢者
 轉々として涙でおどつてゐたとしても。

星の散りくづれた空の
 青く冴えてゆく下で
 ひもじい暗い心が何で知らうか
 すすりなきの止むあてを。

私のまはりにとびおりて
 空中の夜に輝がしくとなき溺れる、
 まづしいく光が

ほそい徑の上にまよひ出でゐるのに。

初夏と孤獨

初夏と孤獨

沼よりあがる光は
 盛りあふれた真珠のやうにはねかへり乍ら
 草の葉に残つた微動を
 足もとに優しくささやかせる。

さはやかな快味がよく輝いた胸の底に生れて
 私はゆく、素足のままに。

初夏と孤獨

私のうちにはかすしれない私がかうまれて
 ちひさい可愛い曙の顔を
 ばら色の眼を
 無限にゆりうごかす手振りをごらん。
 柔かい心をほのかに包んでゆく髪のをば
 つやくしい眼つきで
 その子等は見おくるであらう。

思の絶頂に顫へた音楽
 めざめの肌に苺を滴たらしたよりも濃い歡喜が湧起る—

瞬。

たれこめた私の
沼の窓にせいいつばいよりかかつて
さはつてなぐさめやう。

夜ぎり

1

心配と不満とつみかぶさつて
裂けた土壌のやうな哀れな層をして、
私の床をたたむ。

夜晝うす白いもやが通つて
ほのかな唄聲が夜明けまでありくどかられて、
不眠の美しい夢のまはりに讚美する。

夜ぎり

髪にかけてたヴェールのやうにすらつと女の友達は
ならんでゐるけれど、

私の歎には見劣のする心を深く包んで
どうする力もない夕闇のやうにぼんやりかかれてゆく。

その時は草原に唇を當てて

いち音もなく云ひわけする、

合唱の波と愛着とで溶けかへる胸の轟で。

かくして草原にかみついて涕泣する時でさへ

帯のやうにつきまとつた夜が
はてしなく長いばかりである――。

2

ゆつくりと溶けてくる手招ぎが私のうちにひとつある
なら

胸一ぱい思ひ浮べて、そのありさまをほをむりはしな
かつた。

縁の壁に脊を向けたまんまの
崇つた幽愁を

解けないほど私の手は色あせはしなかつた。

私の體は横はつて
あてもない眼をひらいてゐる、
力のあるたけをもつて手招ぎ
こん限で身をのし上げて——。

綺麗な太陽の輝く間は
私を誘ひ出す力ある歌を忘れ、
友はみなしほれてゐる。

愁深い雲が冬の空に影をおろして
私のちひさい心には映るものを眺なければならぬ
夢の人らと呼び乍ら手を取つて
身に覚えのないざんげに深い思をさせられる。

3

若々しい囚女連が
そよかせのやうに手を投げて
私をとりかこむ

その牢獄ひじやのなかに見る如き

なよびやかな影法師は
 おかされた悲哀と戦慄を
 強い處にまでも……

私は眼力を失つた悲しみに疲れ果てて
 つらい瞑目の中をふみわける……
 眞蒼なキツスを待つ姿を
 いたましい星と星とが見守る時に。

思へばふびんな彼女らの嘸は

私をだかへやうとする第一の聲であつた。
 醜惡な雑音のごよめきは
 いやが上にも支へなければならぬ心の哀音をばしぼる。
 あんまり心もごない慰めにささへかねた心で
 またしくく泣くことを避けやうとすれば、
 吾から埋つたふかあなに渦巻く光のゆらめきに
 肉も心もよるべなくおごんでゆく。

夜ざりはごんよりと立樹と立樹の中に、

夜ざり

そこにはいちめん光がむらむらとなびいてゐる。

心が花の上にとびおりて

やはらかい翼のやうにゆらく夜。

覺えた丈の接吻で以て心が乾き切る、

不意に胸を驚かせて

目に止るだけの花と草葉に歎き掛てゐる有様を

星も月もひしめき合ふやうな激情で

底深く親しく私を見守つてゐるのだ

さらにふた目と當てられない

幽愁をかぶつた私のうしろ姿を、

瞑想を打碎いてくる凄惨なすゝり泣きは、

さまよふ命にからみつかうとする。

その悲しみを

どこまでかつきとめやうとする。

昔見た花片は一枚づゝ慄氣立つて

つめたい汗にぬれた私をのぼり――。

散りのこつたあとのぬるい花の匂がある。

夜ざり

夜ぎり

5

冷やかな光を脊おふて
 静かな圓體が来るやうな
 草原の匂をきく。

草は葉毎にそそられる――。

ためておかれぬ光は自らうづきいでて

草原をはつてゆく。

私はふさがれた思を

あはれむことも出来ない心配さで

おきてゐる。

脈の断えやうとする危険な心の病人よ。

濃のやうに降る星の中にそそられるいたい心を

おほふすべをしらないか

きき残した只ひとつの言葉が

くる夜もくる夜も照らし出されるのを泣きあかしても

私の孤獨のうちに妄想のかりねをつとけるのか

私の安眠の古塚に。

夜ぎり

夜ざり

よな夜な切迫したベエゼのやうに胸の押當らるる。
あなたの激發した深い瞑想――

華麗な潮流ははたくと君が燭の焰に映る幻
嬉しい唄聲が君の力の中から線状をして躍出る。

光のたまつたくぼみに

静かなふたつの合唱を顫はしたき、

人知れずとりあつかつた二人の慟哭を搖ぎたき、
君の嬌つた夜の假面を

ひそかなくちぶれの中に
とりはづせよ。

夜ざり

雪の徑

この上にも深ひ、
より強く泣いて
憧れてゐる影に抱きつかねばならぬ。

星が雪の上につらなつて
花の影も見渡せない野つらを
半身に浴びた光と疲……

生れたまま手ごたへのない悲しみ、
雪と星とが私の上から見る悲しみ、
沼べりの夜毎に繰り返す悲しみ、

私はつひに知らない。
かうして死なずにゐるのを——。
梢がゆらぐのを、
憂鬱の虹のやうに——。

徑

散らけたものが飛翔するやうに
光の湧上る快感を
充溢した響をきいた。

あなたに捧げ得るものはこの響、
そしてはばたいてくる溜息と
蒸發する幻想を追ひまはる
ゆたかなる顫動である。

徑

それにあなたに云ひうることがある。
まどかな夜の一隅につないだ妄想を
ふり向いて情なくなる私の孤獨、
ふかいときめきも
不安なものであるだけ
それだけ私はいつも悲しく酔つてゐる。

ひそんだ光り

ひそんだ光り

1

綺麗な稚兒を

腕に巻き寄せて

耳と耳とすりつけて、

せつないししむらの顔を

花の匂を

かき歩く二人の曙。

濃やかな夜蔭に跡付けて、

風はたのしみ

二人の衣をくぐつたけれど……

手折られたばらの

むきいだされた孤獨の

ほのかなる悲しみ。

2

螢のやうに

光がすい／＼落ち散つて

ひそんだ光り